



高校国語古典教育における「読み比べ」の展望について：

『列子』 「湯問」 および『今昔物語集』の孔子説話を例に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-09-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 市川, 俊太郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/0002000654">https://doi.org/10.32150/0002000654</a>

# 高校国語古典教育における「読み比べ」の展望について

## ——『列子』『湯問』及び『今昔物語集』の孔子説話を例に

市村 俊太郎

キーワード 古典 読み比べ 『列子』 『今昔物語集』

### 1 はじめに

日々、目まぐるしく移り変わる現代社会において、漢文教育は改めてその意義が問われてきている。平成三十年告示の新学習指導要領は、以下のように漢文教育の重要性を説明する。

我が国は中国の文化の受容を繰り返しつつ独自の文化を築き上げてきた。その経緯を踏まえ、古文と漢文の両方を学ぶことを通して、両文化の関係に気付くことが大切である。古来、我が国は、文字、書物を媒介にして、多くのものを中国から学んだ。その結果、漢語や漢文訓読の文体が、現代においても国語による文章表現の骨格の一つとなっている。漢文を古典として学ぶことの理由は、この点にもある。

国語の変遷、さらに現代国語の形成にあたって、漢語と漢文訓読の果たした役割ははなはだ大きいものがある。高校国語教育では、漢文を現代国語における重要な一要素として位置づけたうえで、日本・中国の両文化の関係性を理解することが期待されている。そうであるならば、漢文と古文・現代文との比較読解を行う「読み比べ」は、漢文教育の存在意義にも関わる重要な活動内容と言えるだろう。

本稿は、古典教育の立ち位置と「読み比べ」活動の意義を踏まえたうえで、『列子』『湯問』篇と『今昔物語集』『震旦』の孔子説話を比較し、「読み比べ」の新たな

可能性について模索することを目的とする。

### 2 高等学校国語教育における古典の「読み比べ」

今日における漢文教育の重要な意義の一つは、漢字や漢語が国語に大きな影響を与えた点にある。それは、単に漢文を一つのルーツとして捉えることのみを意味するのではなく、漢文と国文学との差異から、日本文化の独自性を見出すことにもつながるものだと考えられる。

新学習指導要領ではその点を踏まえ、古典の「読み比べ」が学習内容に含まれている。例えば、「言語文化」における「言語活動(読むこと)」に、「ウ 異なる時代に成立した随筆や小説、物語などを読み比べ、それらを比較して論じたり批評したりする活動」の項目を置き、その内容を「異なる時代に成立した随筆や小説、物語などを読み比べ、それらを比較して論じたり、批評したりする言語活動」と定義する。さらに加えて、「読み比べる対象としては、例えば、古典の作品と近代以降の作品との比較、時代の異なる古典の作品同士、明治期の小説と現代小説など、様々なものが考えられる」と補足する。

「言語文化」を基盤とする「古典探究」では、「知識及び技能」の「(2)我が国の言語文化に関する事項」に、「ア 古典などを読むことを通して、我が国の文化の特質や、我が国の文化と中国など外国の文化との関係について理解を深めること」の項目を置く。ここでの解説は極めて示唆に富むものであるので、少々長くなるが本

文中の二段落をそのまま引用する。

我が国の文化と中国など外国の文化との関係については、外国、とりわけ中国からもたらされた学問、芸術、宗教などの文化が、我が国の文化の形成に大きな影響を与えてきたことを理解することが必要である。その際、我々の先人は、それをただ受け入れただけでなく、そこから我が国独自の文化を育て上げてきたということを理解することも古典の学習では不可欠である。この関係を理解するためには、関連する資料を調べたり、古典などを読み比べたりして、分かったことや考えたことなどをまとめる学習も必要となる。

特に、我が国の言語、文学、思想などは、近世までの歴史においては、中国から強い影響を受けつつ独自の発展を遂げてきた。漢文を古典として学ぶことの理由は、このような影響を学ぶ点にもある。漢文の訓読などを通して漢字文化と接触し、その受容によって日本語が形成されてきたこと、現代の日本語にも漢文の影響が残っていること、孔子や孟子、老子や荘子などの思想が我が国の文化に大きな影響を与えていること、漢詩もまた我が国で愛好され、優れた漢詩が数多く作られたことなどについて理解を深めることも大切である。

さらに「思考力、判断力、表現力など」の「言語活動(よむこと)」に、「イ 同じ題材を取り上げた複数の古典の作品や文章を読み比べ、思想や感情などの共通点や相違点について論述したり発表したりする活動」の項目を置き、その内容を「同じ題材の複数の古典の作品や文章を読み比べて、それぞれの作品や文章に描かれている思想や感情などの共通点や相違点を整理して、論述したり発表したりする言語活動を示している」と定義する。本項目での解説では「読み比べ」の具体的内容として、あるいは時代を超えた思想や感情の共通点を読み取り、あるいは受けるイメージの違いや書き手の意図による違いなどの相違点を見いだすことを挙

げる。

このような新学習指導要領の方針にもとづき、各社教科書では、古典における「読み比べ」や「翻案」の項目を置くものも多い。例えば「言語文化」教科書(令和三年検定済)では、全九社が『今昔物語集』と芥川龍之介『羅生門』の比較を採用している。また李景亮『人虎伝』と中島敦『山月記』との比較や、「長恨歌」と『源氏物語』の比較も、扱い方に差こそあれ複数社の教科書において採用されている。古文作品と漢文作品との「読み比べ」には、例えば桐原書店「言語文化」教科書には、『列仙伝』と『唐物語』や、『龍城録』と『伽婢子』を題材に取った翻案教材が載せられており、各社教科書に特色がある。以上の限られた例からみても、「読み比べ」が現代文・古文・漢文の各分野を横断した言語活動の育成に機能していることは明らかであろう。

こうした現状を踏まえ、国語研究の場においても、近年「読み比べ」を対象とした研究が盛んになってきている。とりわけ『白氏文集』と『源氏物語』の「読み比べ」研究は、『学習指導要領』の解説に例示されていることから、その中心的な位置を占めていると言えよう。直近の数例を挙げると、徳植俊之が『源氏物語』『桐壺巻』をもとに、各種注釈や近世の柳亭種彦『修紫田舎源氏』までを視野に入れた、壮大な「読み比べ」教材を提示する(徳植二〇二四)。また実践研究としては、井實充史、古屋明子、加藤和江が充実した成果を発表している(井實二〇二二、古屋二〇二二、古屋二〇二四、加藤二〇二四)。『白氏文集』と『源氏物語』が国文学に与えた影響力の大きさは、否定すべくもない。ただしこの両教材は、「長恨歌」の読み込みが容易ではないなどの問題も抱える。また本稿は、「漢語や漢文訓読の文体が、現代においても国語による文章表現の骨格の一つとなっている」という背景にもとづき、漢文学習の意義を再確認するという問題意識を持つ以上、言語上の比較も兼ねた新たな「読み比べ」教材の探求を行う余地はあるだろう。

そこで本稿では、『列子』と『今昔物語集』にみられる孔子説話を、国語教育「読み比べ」の視点から比較してみたい。当該の『今昔物語集』所録の孔子説話は、『列子』、または『列子』に依拠する別資料から引いて、独自の文体に書きあらためら

れている。両者の比較は、漢文と古文の関係性を学習するうえでも有益であろうと考えられる。

## 2 『列子』『湯問』の孔子説話

『列子』とは、先秦の列禦寇の撰と伝わる文献であり、道家思想にもとづき、多くの説話が収録されている。列子の名は、『莊子』など他の文献にみられるものの、史書にはほとんど記録がないため実在性についても疑わしく、ましてや『列子』が彼の一手によるものでないことは、通説であると言つてよい。前漢時代の学術状況について記された『漢書』『芸文志』には、道家の書として「列子八篇」の書名が既に確認されるが、こちらも現行本との同一性については、疑念が持たれている。西晋末の永嘉の乱によつて、多くの書籍とともに『列子』もまた散佚した。その後、東晋において張疑は佚書を蒐集して校書し、疑の孫の張湛が注釈を付けた。この付注本が現行本『列子』の藍本にあたる。一度散佚を経たうえに、現行本『列子』には、仏典や西晋に発見された『穆天子伝』に通じる内容がみられるということから、古来多くの疑義が呈されてきている。

『列子』は道家系の思想書としての一面があり、また様々な譬え話を収録した説話集としての一面もある。『列子』中には日本で故事成語化された作品も多く、高校漢文教育においても馴染みが深い。大修館書店を除く計八社の「言語文化」及び「古典探究」教科書では、『列子』「朝三暮四」の故事を載せており、その他に「杞憂」や「愚公移山」の故事も、数研出版・大修館書店・文英堂を除く計六社の「古典探究」教科書に載せられている。しかしその反面、故事成語化されていない文章については、採用された様子がない。

本論が対象とする孔子説話は、『列子』『湯問』に収められている。「湯問」は、西晋竺法護の漢訳『生経』に拠るとされる「木人説話」が含まれており、その成立に疑わしさを含むところであるが、この孔子説話については、両漢交代期頃の人の桓譚が撰した『新論』に録されていたようであり、遅くとも漢代頃には既に成立していたと考えて良いだろう。「湯問」篇の孔子説話は、以下の通りである

(本文は、楊伯峻『列子集釈』に拠り、正字を新字に改めている)。

孔子東に遊び、兩小兒の弁闘するを見て、其の故を問ふ。一兒曰く、「我以へらく日の始めて出づるの時、人を去ること近くして、日の中ばの時遠しと。一兒以らく、日の初めて出づるや、遠くして、日の中ばの時近し」と。一兒曰く、「日の初めて出づるや、大いさ車蓋の如し。日の中するに及ぶや、則ち盤盂の如し。此れ遠き者は小にして近き者は大なるが為ならずや」と。一兒曰く、「日の初めて出づるや、滄滄涼涼たり。其の日の中するに及ぶや、湯を探るが如し。此れ近き者熱くして遠き者涼しきが為ならずや」と。孔子決すること能はず。兩小兒笑いて曰く、「孰れか汝を知多しと為すや」と。

(孔子東遊、見兩小兒弁闘、問其故。一兒曰、「我以、日始出時、去人近、而日中時遠也。一兒以、日初出遠、而日中時近也。」一兒曰、「日初出大如車蓋。及日中、則如盤盂。此不為遠者小而近者大乎。」一兒曰、「日初出滄滄涼涼。及其日中、如探湯。此不為近者熱而遠者涼乎。」孔子不能決也。兩小兒笑曰、「孰為汝多知乎。」)

内容は、孔子が東遊の際、道端で議論をしていた二人の児童に話を聞くも、朝と昼とで太陽はどちらが近いかという難題に孔子自身答えることができず、かえって児童らに笑われるというものであり、知を重んずる儒家を揶揄した、道家的立場が如実に表れた説話となっている。片方の児童の言い分は、朝日はまるで車の傘のように大きく(また別本では車輪とする)、昼の日は皿のように小さいため、朝日の方が地に近く、昼の日の方が地から遠いとす。もう片方の児童の言い分は、朝は涼しく、昼は湯に触るよう暑いいため、朝日の方が地から遠く、昼の日が地に近いとする。末尾の「孰為汝多知乎」とは、『論語』「衛靈公」の「子曰く、賜や、女、子を以て多く学びて之を識る者と為すか(子曰賜也女以予為多学而識之者与)」に由来した表現である。

本節話の文章については、「以」字を「おもう」と呼ぶなど、幾分か解説を要する点もあるが、総じて平易なものとなっている。類比の「如」や、不可能の「不能」、反語の「孰……乎」など、重要語句も多い。また太陽が朝に大きく見え、昼に気温が上がることを踏まえたうえで、太陽の近さを論じる点も、感覚的に理解しやすい内容となっている。

### 3 『今昔物語集』の孔子説話

『今昔物語集』は、平安時代末頃に成立したとされる説話集である。源隆国編『宇治大納言物語』との関係も指摘されるが、詳細な時期や編者など、不明な点が多い。その特徴として、現行本に欠巻や欠文といった不完全な面がある一方、全体的な構成については、天竺(インド)・震旦(中国)・本朝(日本)の三國や、仏法部と世俗部の二部から成るなど、極めて体系的な面があることも指摘されている。

新学習指導要領対応の教科書においても、『今昔物語集』の説話は複数採用されている。代表的なものとして、上述の芥川龍之介「羅生門」この読み比べがあり、古文と現代文学との橋渡しとして、格好の材料を与えてくれている。他の教材としては、「阿蘇の史、盗人にあひてのがるること」(大修館書店「言語文化」)、「安倍晴明」・「馬盗人」(大修館書店「古典探究」)「鷲にさらわれた赤子」・「賀茂の祭りを見物する翁」(筑摩書房「古典探究」)が採用されている。

「震旦部」巻十第九は、主に『莊子』や『列子』を典拠とした孔子説話が複数収録されている。ただし最後の説話を除くそのほとんどは、孔子が幼い子供に言いくるめられ、失態を見せるという内容となっている。本論で扱う孔子譚も、その傾向と軌を一にしている。以下、本文を引用する(本文は、小峯和明校注『新日本古典文学大系34 今昔物語集二』に拠り、仮名を平仮名に改めている)。

亦、孔子、道を行き給ふに、七八許(ばかり)の二人の童、道に値ひぬ。共子に問て云く、一人の童の云く、「日の始めて出づる時は日近し。日中(なか)

ばに至ては日遠し」と。一人の童の云く、「日の始めて出づる時は日遠し。日中に至ては日遠し」と。先の童、亦返して云く、「日の出る時は熱くして、湯を探が如し。日中に至ぬれば涼し」と。後の童、亦返て云く、「日の出づる時は涼し。日中に至りぬれば熱くして、湯を探るが如し。豈に、日の出づる時は近く、日中を遠しと云はむや」と。如此く二人して諍て、問ふと云へども、孔子裁(ことわり)給ふ事不能。

其の時に、二人の小児咲て云く、「孔子は悟り広くして、不知ぬ事不在(ましまさず)とこそ知り奉るに、極めておろそかにこそ在しけれ」と。孔子、此れを聞き給て、此の二人の童を感じて、「只者には非ぬ者也けり」となむ讚め給ひける。昔は小児も如此き賢かりける也。

本説話について言えば、全体の筋書きは『列子』と共通しているものの、細部において決定的な違いがみられる。それは、太陽の遠近を議論する児童二人が、どちらも暑さを根拠としている点である。『列子』では、片方の児童が、太陽が昼に遠ざかるという主張の根拠として、「朝日は大きく昼の日は小さい」ことを挙げているのに対し、『今昔物語集』では、「朝は暑く昼は涼しい」ことを根拠として挙げているため、議論が噛み合わないような印象を受ける。そのため、この説話を直接に高校国語教材として扱うことは、不要に学習者を混乱させる恐れがあるため、あまり適切ではない。また他の相違点として、『列子』では孔子への嘲笑で話を終わらせているのに対し、『今昔物語集』では、その後孔子が両児童を「只者には非ぬ者也けり」と称賛している。この相違については、次節であらためて論じたい。

### 4 孔子像の比較

それでは両説話を「読み比べ」の視点から比較すると、どのような意義を見出せるだろうか。

最大の焦点となるのは、孔子の評価についてであろう。『列子』の説話では、児

童に笑われた孔子に対して、何ら擁護するところがない。注釈者の張湛は、「所謂六合の外は、聖人存して論ぜず」と『莊子』を引いて解説するが、本文「決する能はず」という様子だけでは、そこまで読み取ることができない。

一方で、『今昔物語集』の書法は、『列子』と大分印象が異なる。この点については、『今昔物語集』研究の側から、多くの言及がなされている。まず小峯和明は、「孔子を揶揄し、その権威を失墜させる面に焦点があり、孔子の賢人ぶりをたたえる組織化と相反する」と述べ、巻十第九が賢臣としての孔子叙述を意図しながらも、孔子の戯画化に焦点があることを指摘する（小峯一九八五）。同じく山本五月も、この説話から賢臣譚と戯画化の矛盾と葛藤を読み取っている（山本二〇〇三）。このような見方と異なり、『今昔物語集』の説話には、孔子への敬意が存するとの意見もある。宮田尚や川上知里は、孔子への敬語表現や礼賛エピソードの付加から、『今昔物語集』に孔子への敬意は存しつつも、資料不足からやむを得ず採用したと推測している（宮田一九九二、川上二〇二二）。同様に高陽も、「また尊崇され礼賛されるべき孔子と、揶揄され諷刺される孔子との二極に『今昔物語集』は引き裂かれている」と指摘する（高二〇二二）。また上田設夫は、十巻第九の説話群では、孔子を「小知を排し大知に即く」という『莊子』的聖人として描いていると主張し、この説話が意図して採用されたものだと考える（上田一九八八）。

以上のように、『今昔物語集』の孔子像は多様に読み解かれてきた。ここで『列子』との「読み比べ」を行うと、両者の違いは一層顕著にあらわれる。前述した通り、『今昔物語集』の説話は『列子』と異なり、嘲笑された孔子が両児童の非凡さを称賛し、さらに「昔は小兒も如此き賢かりける也」と話をしめることで、孔子の愚かさより児童の賢しさの重点が置かれている。児童への称賛について、小峯和明は、孔子の戯画化における焦点のぶれであると評するが、結果として相対的に孔子が擁護されていることは確かであろう。『列子』の描く孔子像と、それを受容し読み換えた『今昔物語集』との相違点と云うことができる。

さらに文章表現について着目すると、既に先行研究で指摘されるように、孔

子の言動に対して、「道を行き給ふ」、「裁り給ふ」、「聞き給て」、「讚め給ひける」と尊敬の補助動詞が付されており、一定の敬意の表われが認められる。こうした敬語表現の有無は、『今昔物語集』のみならず、漢文と比較した際の古文の特徴でもある。つまり両資料の比較は、内容の差異にとどまらず、漢文と古文の文法表現の違いをも浮彫りにするものである。これは、新学習指導要領が示した「我々の先人は、それをただ受け入れただけでなく、そこから我が国独自の文化を育て上げてきた」ということを理解する」という目的のもと、古文と漢文との「読み比べ」における有意義な教材となると言えるだろう。

## 5 おわりに

『列子』『湯問』及び『今昔物語集』の孔子説話は、重大なテキスト上の問題を抱えているため、そのまま高校教育における教材として活用することは、非常に困難であるかもしれない。しかし両者を教材研究の視点から分析することによつて、漢文作品と古文作品の比較から、日本における中国説話の受容の様相のみならず、両者における文章表現の相違もあわせて学習し得る可能性が示唆された。

再度本教材に即して言うならば、戯画化される孔子という筋書きの共通性がまず読み取れ、次に補足内容と敬語表現に着目することで、孔子への敬意の有無という相違点を読み取れる。以上の活動によつて学習者は、日本における『列子』説話と独特な孔子像の受容の過程を学び、かつ所謂漢文と古文の文章表現の特徴と相違点を学ぶことが可能となるだろう。これらは、新教育指導要領が目指すところの、漢文の意義を理解することや、日本文化の独自性を再認識すること、一層促すものであり、「読み比べ」の意義を深く内含した教材である言えるだろう。

今後の課題として、このような効果的な「読み比べ」が可能でありつつ、実際上の運用に耐えうる作品の探求すること、そして実践的な教材として構築することが求められる。

## 参考文献

(基礎資料)

『高等学校学習指導要領(平成三〇年告示) 解説』、東洋館出版社、二〇一九年。

楊伯峻『列子集釈』、龍門聯合書局、一九五八年。

小林信明『新釈漢文大系22 列子』、明治書院、一九六七年。

小峯和明校注『新日本古典文学大系34 今昔物語集二』、岩波書店、一九九九年。

池上洵一訳注『東洋文庫383 今昔物語10 震旦部』、平凡社、一九八〇年。

(研究書・研究論文 五十音順)

井實充史「外国文化との関係を理解するための物語教材の開発「分析編」――

――『源氏物語』桐壺巻と「長恨歌」との読み比べ――」(『福島大学人間発達文化学類論集』三五号、二〇二二年、所載)

上田設夫「敬して親しまず――今昔説話の孔子――」(『国語と国文学』、一九八八年、所載)。

加藤和江「読み比べで深める「長恨歌」と『源氏物語』(藤壺巻)」(『中国文化研究と教育』第八二号、二〇二四年、所載)。

川上知里「今昔物語集攷 生成・構造と史的圏域」、花鳥社、二〇二二年。

高陽「説話の東アジア『今昔物語集』を中心に」、勉誠社、二〇二二年。

小林勝人「列子の研究――老荘思想研究序説――」、明治書院、一九八一年。

小峯和明「今昔物語集の形成と構造」、笠間書院、一九八五年。

徳植俊之「『源氏物語』の「読み比べ」授業を考える――「桐壺巻」を中心に――」(『文学・語学』第二四二号、二〇二四年、所載)。

古屋明子「桐壺更衣の人物像を探る――『源氏物語』桐壺巻と「長恨歌」との読み比べ――」(『教職課程センター紀要(大東文化大学)』七号、二〇二二年、

所載)

古屋明子「『源氏物語』帚木巻と『白氏文集』風諭詩との読み比べ」(『教職課程センター紀要(大東文化大学)』九号、二〇二四年、所載)

山本五月「臣下・貴族」(小峯和明編『今昔物語集を学ぶ人のために』、世界思想社、二〇〇三年、所載)。

宮田尚「今昔物語集震旦部考」、勉誠社、一九九二年。

※本稿は、『国語速報』第一巻(国語探究研究会、令和七年(二〇二五)五月十日受理)に掲載された論稿を一部修正し、再掲したものである。

(いちむら しゅんたろう／三重大学 特任教員)